2023年4月9日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私を捜し、求める神様

［ルカによる福音書24章13～35節］

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

1. 復活の主は誰かを目指している

今日は、イースターですね。イースター。主イエスが死んでお墓の中に葬られましたけれども（それが金曜日）、その日から数えて三日目の朝、つまり日曜日の朝、イエス様の亡き骸はそこにはなく、「この方はもうここにはおられない。復活なさったのだ」いう天使の言葉が、墓を訪れた女性たちに告げられたという出来事が聖書に記されています。誰も、むっくりと起き上がったイエス様のお姿を見た訳ではないのですね。イエス様の復活とは、死から甦った神の子が、ふらふらと歩き回って多くの群衆がそれを目撃した、ということではありません。むしろ、復活されたイエス・キリストは、誰かを目指しているように思います。‟この人と出会うために復活する”と言ったら良いでしょうか、主の復活とは、蘇生（生き返り）ではなく、「新しい出会い」なのだと思います。例えば誰とでしょうか？聖書を見ると、それはイエス様を見捨てた弟子たち、特にシモン・ペテロやトマスとの出会いは詳細に書かれていますし、また印象的なマグダラのマリアとの出会いがあります。そしてルカ福音書だけが記してくれた、今日読んで頂いた「エマオへの道を行く弟子たちと語らうイエス」の記事も、世界中で繰り返し味わわれているイースターには欠かすことの出来ない物語です。

[2] 勘違いだらけの私たちに声をかける方

イエス様が復活された日（つまり今日）、あの12弟子には入っていなかった二人の弟子が、エルサレムからエマオという村に向かって歩いていました。多分エマオという村は自分たちの住まいがあったのでしょう。エルサレムからそこに向かって戻ろうとしたのだと思います（11キロ程の距離です）。彼らの中には失意や暗い心があったようです。―私たちがついてきたイエス・キリストはエルサレムの郊外で無残にも殺されてしまった。私たちが出会った中であんなに愛を注いだ人はいない。彼はきっとローマの支配下に置かれているこのイスラエルの国の誇りを回復してくれる救世主だと思って期待していたのに、私たちはこれから一体どう生きたら良いのだろうか…と考えていたらしいということが、彼らが発した言葉から分かります。私たちは既にイエス・キリストがそのような政治的な、世直しのリーダーではないことは知らされています。ですからこのクレオパと、もう一人の弟子のイエス様への捉え方は‟勘違い”なのですが、それを私たちは笑うことは出来ません。あのイスカリオテのユダの理解もそのようなものでしたし、あの一番弟子のペトロもまた、イエス様がご自分はやがて十字架につくのだと語られた時「そんなことがあってはなりません」とイエス様をたしなめたとさえ書かれています。そう、弟子たちも、イエス様がまさか私たちの罪の身代わりになって神様の裁きを身に引き受けられるなどということは誰も考えることは出来なかったのです。ですから弟子たちは皆十字架の場所から逃げだしてしまいましたし、このエマオへの道を行く二人も同じなのです。イエス様からご覧になったら、がっかりするような弟子たちの姿です。…でも、それは、私たちの姿を映していると言えると思います。私たちの信仰、いや、私の信仰というのは、結構自己中心な信仰です。イエス様のことを捉えているようで、イエス様の思いとはどこかずれている。いや、ずれまくっているのかもしれないと思います。そのような中、私たちは自己判断でイエス様に躓き、あぁ、信じたのに何だか虚しい、という思いに駆られるということはあるのではないかと思います。

　しかし、このエマオに向かって、揺れる心を抱えて歩いている二人にイエス様自らが近づいて声をかけられたのです。まだこの時、二人にはイエス様の正体は分かりません。17節にこうあります。「イエスは、「歩きながらやり取りしているその話は何のことですか」と言われた。」　イエス様は頭ごなしに、お前たち情けないな、と言われるのではなく、勘違いであれ、不信仰であれ、いずれにしても悲しみの中に歩いている者たちにそっと近寄り、「聴く者」となっていて下さっています。これは凄いことではないでしょうか。私は思ったのですが、この時彼らが心に抱いている思いは何なのか。―それは「喪失感」ではないかと思います。「喪失感」。あのイエスは死んでしまった。酷（むご）い死を遂げてしまった…。

私たちは大人になると、愛する者を失う「喪失」の経験を致します。特に家族や信頼していた者との死別を経験することがありますね。それは経験して初めて実感する感覚であって、単に亡くなった人の死ではなく、自分自身の一部が剥ぎ取られていくような、失われていくような、そんな感覚です。或る意味「私の死」です。イエス様に「その話は何のことですか」と尋ねられた二人は「暗い顔をして立ち止まった」とあります。喪失感は、私たちの顔から表情を消します。小さな「死」と言っても良いかもしれません。しかし、復活されたイエス様が、自分ではどうすることも出来ないその心の中に、静かに入り込んできて下さって、夕暮れの闇の中へと歩を進めていた者を「立ち止まらせて」下さるのです。それは丁度失われた一匹の羊を、ご自分の懐の中に抱くまで捜し抜いて下さるまことの羊飼いとして、近づいて来て下さるのだと思います。「良い羊飼いは、羊のために命を捨てる」（ヨハネ10:11）のです。そして主は確かにそのことをして下さいました。

イエス様は私たちの「死」が何であるのか、「悲しみ」「孤独」が何であるかを、私たち以上に知っていて下さっている方です。神ご自身がイエス様となって、人の「死」と「悲しみ」を経験されたのです。「死」と「悲しみ」の力は、私たちの顔を暗くするほど私たちを虜にする時があります。でもどうか、生きることを諦めることがないように！私たちが「死」で終わることのない命を私たちに与えるためにこそ主は死から甦って下さいました。25節以下で主はこう語られました。―「そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」―これは私たち不信仰な者たちに対するイエス様の本気の言葉です。自分の妄想に入り込むな。妄想は罠だ。み言葉に聴きなさい、み言葉に聴いて生きて行きなさい！ということだと思います。

[3] 「出会い」とは「出て」「会う」こと

これを聞いた二人は、イエス様がなお先へ行こうとされるので「一緒にお泊りください」（29節）と引き止めました。対話の中で心の中に光が射してきた。最早暗い顔ではなかったでしょう。そして食事の席になった時です。イエス様自らがパンを取り、讃美の祈りを唱え、裂いて渡されたのです。いつの間にか客であったこのお方が食卓をリードしています。主客が逆転しました。これが、信仰ですね。これまでは自分の思いの中で、自分にとって役に立つイエス様を信じていて、役立たなくなれば信仰も終わる。しかし、私たちがイエス様を掴むのではなく、イエス様が私たちのことを掴まえるのです。イエス様にリードして頂くのが私たちの信仰です。この二人、目が開け、この方こそ復活されたイエス様だと分かり、エマオに着く前に、急いで自分たちが去ってきた十字架の救いの現場に戻ったのです。そこには籠っていた他の11人の弟子もいました。この二人の熱い思いと明るい顔は、他の11人の心にも再び信仰の灯火を点火させたのではないでしょうか？

ある人が言いました。「出会い」とは「出て」「会う」ことだと。どこから「出る」のでしょうか？「自分の殻」から、「自分の妄想」からです。でも残念ながら、自分の力では「出る」ことは出来ません。そこから出して下さるのが主の語りかけです。「その話は何のことですか」＝「あなたの問題は何ですか？」と、主は私たちを求めていて下さっているのです！主は私たちを失いたくない。ですから主は私たち目がけて復活して下さったのです！それ以外に復活の理由はありません！主は、中途半端なゾンビのような存在ではありません。本当に本当に「生きて」おられるお方です。この方と「出会う」ために私たちは生きています。そこから、復活の命の息吹を与えられてそれぞれの場に遣わされていくのです。主が共にいて下さるという確信、それがどんなに日常に勇気を与えて下さることでしょうか！そして、肉体の死を迎えても、私たちはこの方に導かれて、永遠の生命の祝福の中に、先に召された愛する者たちと共に生きるその世界が準備されているのです。主のご復活、おめでとうございます！ お祈り致します。

愛する神様、この日イースターの明るい朝を感謝致します。私たちがあなたを捜すのではなく。あなたが私たちを捜し、見出して下さいました。そして、私たちの死を引き受けて下さって十字架にかかり、甦り、今、共に生きていて下さいます。どうか、み言葉を通し、常に新しくあなたと「出て」「会う」ことが出来ますように。復活の主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。